

---

# それは暗殺者のように

無名 新人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それは暗殺者のように

### 【Nコード】

N0011J

### 【作者名】

無名 新人

### 【あらすじ】

俺は今日も夜の街を見ていた。

星ひとつない夜だった。闇に溶け込むような色をした雲。朧げな三日月が浮かぶ。疎らな街灯が狭い路地を淡く照らす。犬の遠吠えだけが響く閑静な住宅街。

俺は窓の外を見下ろしていた。

携帯に目をやる。もうすぐ午後十時になろうとしていた。そろそろ時間だ。

街灯でそこだけ浮かび上がる丁字路へ、俺は食い入るように目を向ける。かすかに聞こえ始めた足音。ふいに、ぼんやりと人影が照らし出される。

奴が現われた。

（辺りには誰もいない）

吐く息の白さがこの距離からでも見える。身を包むような紺のコートから、赤黒い臍脂色のタイが覗く。

（今なら………）

息を呑んで目を見張る。奴の足取りは重い。

（いや、まだだ）

視界の隅、丁字路の向こうからバイクのライトとエンジン音。

俺は昂りを抑え、窓から部屋の隅まで一旦離れる。外からは死角になるはずだ。

やがて、真向かいの家の門が軋みながら開き、ドアの閉まる音が聞こえた。二階に明かりが灯る。そして、忙しく動いている影が窓に映り込む。

そこまで確認し、俺は窓を閉め、厚いカーテンを引く。そのまま後ろからベッドへ倒れ込むように仰向けになった。おもむろに机へ置いてある写真に手を伸ばし、拾い上げる。あいつの写真だった。笑っている。

俺はずっとあいつを追い続けていた。

写真の端を弄りながら眺める。俺はあいつのことを片時も忘れたことはない。長い、長い年月の出来事が頭の中を駆け巡っていく。いつの間にか、ふっと笑みが零れていた。

そろそろ決着を着けよう。

朝。近所の犬が鳴く声に紛れ、向かいの扉の開く音が聞こえた。奴の出かける音だ。門が閉じられたのを確認し、俺も後から外に出る。

霜の降りた後の冷たい風が頬を掠めていく。寝不足の目に沁みる、白い薄刃のような陽光が斜めに降り注いでいた。車の通らない住宅街の路地。中年の草臥れたスーツの男が駅へ向かって足早に通り過ぎ、ランドセルを背負った賑やかな小学生の列が横切る。

俺は奴と電柱三つ分の距離を保っていた。黒のコートを着たあいつは、いつもと変わらない様子でキビキビと前を歩く。

その後ろ姿を、逸る気持ちを押し止め、見据えていた。

夕方。日も沈みかけた頃、衝撃的な情報が入った。奴がこれから見知らぬ男と会うらしい。

しかし、俺は奴を見失っていた。いつもならいるはずの場所にもあいつの姿が見当たらない。嫌な予感が広がる。

息を切らせながら階段を三段飛ばしで駆け上がっていく。どうしようもない焦燥に駆られる。このままでは手遅れになってしまうかもしれない。俺の八年間はいつたいたんだったのか。

（頼む、間に合ってくれ！）

最上階で息を荒げて階段の手すりに寄りかかる。目の前にはあちこち塗装が剥げ、錆び付いた青褐色の扉。曇りガラスからは屋上の様子を窺い知ることができない。額に噴き出た汗を手の甲で拭いながら、取っ手に手を掛ける。喧しい音を立て、古びた扉が頭ひとつ分開いた。僅かな隙間からは誰も見当たらない。慎重に顔を扉から覗かせて見回す。目に入るのは屋上一面に敷き詰められている黒ず

んだコンクリートだけだ。

（ガセか）

呼吸を落ち着かせ、屋上に降り立った。ゆっくりと扉が錆び付いた音を立てて閉じ始める。

見渡す限りの空は橙から茜に変わり、透き通るような月が浮かんでいた。冷たさを増した北風が全身を撫で回して吹き抜けていく。遠目には、寒そうに背を丸めた男子高校生が連れ立って歩く姿が映っていた。

「誰を探してるのかな」

冷たいものが走る。突然後ろから投げかけられた言葉が全身を駆け巡り凍て付かせた。世界が、時が、止まる。

錆びだらけの扉が一際大きな音を立てて閉まった。

奴だ。この声は忘れもしない。胸が激しく打ち付けられる。視界が鼓動に合わせて揺らいでいるかのようだ。

こちらに歩み寄る靴の音。俺は振り向けない。心音が波紋のように広がっていく。俺はハメられた。事実が脳裏を掠める。

「何か言う事は？」

耳をくすぐるような声。奴の気配をすぐ後ろに感じる。額を押さえたくなるほどの眩み。血の巡る音がひとつひとつ、鮮やかに刻まれていく。

こんな状況は初めてだ。しかし、俺は今までに何度もこの場面を思い描いていた。次の行動を頭に浮かべていく。

息を大きく吐いた。

そして、振り向く――

「きれいになった」

肩の上に、沈みかけた夕日が輝いていた。紺のブレザー。白いシ

ヤツと赤いリボンタイ。流れるような肩まで伸びた髪。細い首に白く透き通る肌。一点から朱色に染まる。

口を吐いて出たのは、率直な心情。頭に描いた言葉は消え去っていた。

「散々『男みたいだー』ってからかったのは、どこの誰だっけ？」  
凜とした瞳が少し細くなる。

昔はよく、そうからかっていた。こいつはどこへ遊びに行くにも付いて来た。まるで弟みたいに。

「今はきれいだ」

他に言葉が浮かばない。

こいつはいつ頃からか、どんどん女らしくなっていた。中学に上がる頃には女友達に囲まれ、男連中からも意識されていた。誰も『男みたい』などと言われていたとは思わない。以前のように遊ぶことはなくなっていた。それどころか、話すこともない。俺も男連中の例外ではなかった。どこか遠くの、手が届かないところへ行ってしまったと感じていた。

「他に言うことはないの？」

昔の面影を残す大きな口。薄い唇が微笑を浮かべていた。

俺はそれからまともにこいつと話したことがない。今こうして向かい合って話すのは、実に三年振りだ。高校になった今も“こいつ”なんて言ってるのは、ただの強がりだった。

でも――

「きれいになったからじゃない」

見つめる瞳。瞬きが早くなる。

俺は知っている。

からかうような口調で目を細めるのは、緊張してるってことを。

俺は知っている。

後ろに組んでる手、左手が震えてるってことを。

俺は知っている。

ずっと、八年も前から見ていたから。俺にはわかる。

右の口元が少しゆるんでるのは、本当につれしいってことを。

後ろから広がる夜空が、辺りを紫黒へと変えていく。  
少しずつ、星が瞬き始めていた。

「ずっと好きだった」

これからは隣で見たいんだ。

（後書き）

夕日が好きです。

くちなしのように淡く。燃えるような茜色。

過去のやさしい記憶を呼び起こしてくれるから。

いつかの切ない思いが湧き上がるから。

この心に宿る黒い感情を押し流してくれるから。

また遥かな高みを目指そうと思えるから。

歳を重ねるごとに、色んなものが浮かんでいきます。

それではまた。

できれば今度は、別の夕日のお話で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0011j/>

---

それは暗殺者のように

2010年10月8日15時25分発行